

金沢城下町の眺望景観に関する研究

神山 藍¹

¹正会員 金沢工業大学 講師 環境・建築学部 環境系 (〒921-8501 石川県野々市市扇ヶ丘7-1)
E-mail:ran.kamiyama@neptune.kanazawa-it.ac.jp

本研究では、金沢城公園から金沢城下への眺望を明らかにすることを目的とする。金沢城公園には、これまで、本源寺、金沢御堂、金沢城が造営されている。そこで、本研究では、これらの施設の歴史的背景を調査し、どのような風景を眺めていたのかという点について、施設の性格、視点場の位置、視対象、および可視領域によって明らかにする。その結果、本源寺では、日本海に沈む夕日を西方浄土に見立てる信仰の対象としてみる景観が明らかとなった。金沢御堂からは、信仰の対象だけでなく、天然の要害を利用し、周囲の勢力寺院を見渡せる防衛的な景観があったと言える。金沢城からは、天然の要害に石垣や櫓などの人工を加えた景観形成がされたことが明らかとなった。

Key Words : landscape, vista, castle, watchtower, GIS, Kanazawa

1. 研究の背景と目的

金沢城は、南東から延びる小立野台地の西端に位置し、城下には、北の浅野川、南の犀川を境に金沢城下町が広がる。城の北東には卯辰山、南西には野田山が控え、風向明媚な地である。

現在の金沢城公園には、延元4年(1339)覚如によって創建された本源寺、天文15年(1546)石山本願寺により加賀一向一揆の本拠として建立した金沢御堂^{1) 2)}、天正8年(1580)佐久間盛政による尾山城、天正11年(1583)前田利家による金沢城本丸が造営された。その後、陸軍の拠点、金沢大学キャンパス利用を経て、現在に至る。宝暦9年(1759)の宝暦大火により城の大半を焼失し、近年では、菱櫓、五十間櫓、橋爪門続櫓などが再建されたものの、当時の景観を知る手がかりは少ない。

そこで、本研究では、本源寺、金沢御堂、金沢城の3つの施設の歴史的背景を整理し、それぞれの時代の景観を把握することを目的とする。

2. 研究の方法

それぞれの施設から、どのような景観が形成されていたのかについて明らかにするために、まず、歴史的背景を整理し、重要視された視対象を抽出する。次に、史料、古文書、古地図、絵図などから、主要な視点場の位置と性格を把握し、最後に、視点場からの可視領域と視点場の性格により、各時代の景観を把握する。視点場の位置が特定できない場合は、視対象からの可視領域により、景観を把握する。

3. 金沢城からの眺望景観

(1) 本源寺

本源寺³⁾の創設は、延元4年(1339)に本願寺第三世覚如が加賀巡錫の砌に一字の草庵を建て、これを本源寺と名付けたとされる⁴⁾。草庵は丘上の金沢城内にあったとされ、本堂、茶所、石川門、河北門などの結構を形成し隆盛を極めた⁵⁾。二の丸から三十間長屋のある本丸付段へ渡る極楽橋と蓮池は、本源寺の遺構とされている⁶⁾。極楽橋は、この橋下より死人の葬棺を送る際の遺名であるとされる⁷⁾。金沢御堂時代にも、参詣する人が朝、念仏を唱えながらこの橋を渡り、夕方、日本海に沈む夕日を拝んで極楽往生を願って帰ったと云われていることから、本源寺の景観として、西方浄土を願う景観が形成されたと言える。本源寺の正確な位置は不明であるため、金沢市内の海岸線からの可視領域は把握すると、本源寺のあったとされる金沢本丸の一部から日本海が眺められたことがわかる(図-1)。

(2) 金沢御堂

a) 金沢御堂についての歴史的背景

文明3年(1471)蓮如が越前の吉崎に坊舎を構えたことにより、一向宗は急速に加賀にまで広がった。一向宗の普及と富樫氏の内紛により、長享2年(1488)6月本願寺派の坊主を主体とする一向一揆勢が起り、守護富樫正親が自害した。この時の一向一揆勢は、本願寺派の(鳥越)弘願寺、(吉藤)専光寺、(磯部)勝願寺⁸⁾、(木越)光徳寺の「四ヶ寺大坊主」が主導権を握ったと

されている。

その後、明応8年(1499)に蓮如が死去し、「加州三カ寺」と呼ばれる蓮如の七男蓮悟の本専寺、蓮如三男の蓮綱松岡寺、蓮如四男の蓮誓の光教寺が台頭し、加賀一向一揆の主導的地位を確立した。

享禄4年(1531)には、享禄の錯乱と呼ばれる大小一揆が起り、永正の一揆により加賀へ亡命した藤島超勝寺、和田本覚寺と蓮如の子息らの加州三カ寺(本専寺、松岡寺、光教寺)との主導権抗争が起こる。これにより、加州三カ寺は没落し、本願寺本山派の勢力が増した。天文15年(1546)には、石山本願寺により加賀一向一揆の本拠とする金沢御堂が建立し、「百姓ノ持タル国」として天正8年(1580)の金沢御堂陥落まで、加州惣国の政庁として機能した(図-2)。

b) 金沢御堂の位置と性格

金沢御堂の位置については、金沢本丸跡とされるのが通説である。金沢御堂の選地に関しては不明であるが、石山本願寺の地は、北は淀川、東は大和川に挟まれた丘陵地帯にあり、景勝地である。海への水上交通の要衝であり、要害の地でもある。金沢御堂の選地もこれに追随したことが考えられる。北に浅野川、南に犀川が流れ、小

立野台地の西端に位置し、西方には日本海への交通の要衝である宮腰が位置するなど、天然の要害としての資質と交通の要衝を備えており、度重なる一揆を防ぎ、見方を守るのに適した要害の地であったと言える。一方、御堂建立の際には、阿彌陀如来が安置され、利家が七尾城から入城した際には、「利家の居館は即ち本丸の地に在りし金澤御坊の佛殿を假用したりしが故に、その棟木に結ばれたる梱包より阿彌陀如来の像を発見したることありて、利家夫人は之を持佛とせしが、後西本願寺の支院に與へて本尊となさしめたりと傳ふ⁹⁾」とあるように、人々の拠り所としての性格もあった。

c) 金沢御堂の景観

金沢御堂創建時に勢力を保っていたのは、四カ寺大坊主、超勝寺、本覚寺であり、これらの寺院を監視下に置くことは重要であったろう。金沢御堂周辺に位置する四カ寺大坊主からの可視領域を把握すると、金沢御堂からは、四カ寺を見渡せることが分かる(図-3)。

以上を整理すると、金沢御堂は、城郭寺院として天然の要害を利用した眺望により、勢力寺院を俯瞰できる景観形成がされたと言える。



図-1 海岸から本源寺への可視領域

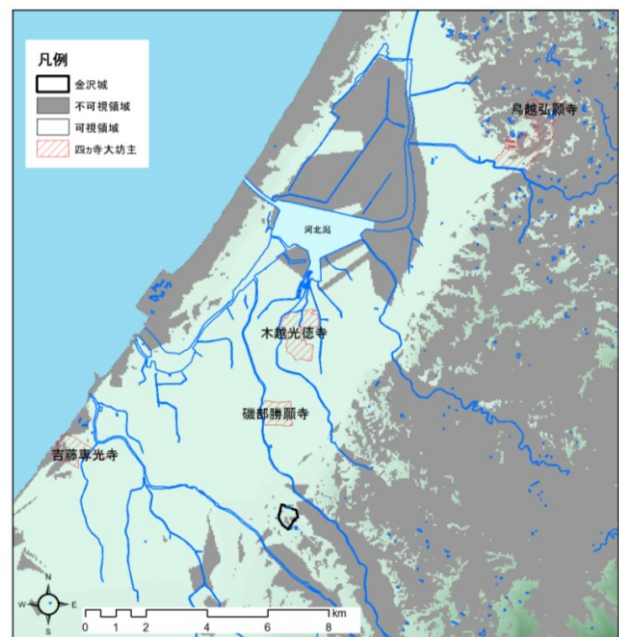


図-3 四カ寺から金沢御堂への可視領域

	1471年	1488年	1506年	1531年	1546年	1580年	1583年
	蓮如 吉崎に坊舎建立		長享の一揆 永正一揆	大小一揆 (享禄の錯乱)	金沢御堂建立	陥落 尾山城	浅ヶ岳の合戦
本願寺本山	1339 本源寺				金沢御堂建立	陥落 尾山城	金沢城
四カ寺						1580 陥落	1584 松松に移転
鳥越弘願寺	1350 創建						1609 加賀爪に移転
吉藤専光寺	1320 創建		1469-1484に吉藤村に移転				市内に移転
磯部勝願寺	創建不明						
木越光徳寺	1274 創建					1580 陥落	
加賀							
二俣本専寺	1442 二俣坊		1487 坊舎建立		廃寺		
加州三カ寺							
波佐谷松岡寺	1451 波佐谷坊		文明年間創建?		廃寺		
山田光教寺	1474 山田坊		1486 創建		廃寺		
藤島超勝寺					1506 加賀に亡命	1580 陥落	
和田本覚寺					1506 加賀に亡命	1580 陥落	

図-2 加賀の一向一揆における寺院の勢力変遷

(3) 金沢城

a) 金沢城の歴史的背景

天正 8 年 (1580) 宮腰に布陣した柴田勝家¹⁰⁾が、金沢御堂を攻略し、佐久間盛政が小立野台地より攻め立て、金沢御堂は陥落した。盛政は、金沢御堂を尾山城と改め、天然の要害の地に土塁や堀などの人工の手を加え、城郭を形成した。この際に、蓮池堀も形成されたと言われていた小立野台地の西端に位置する尾山城に堀を穿つことによって孤立させ、小立野台地からの防御を固めた。しかし、その 3 年後、同 11 年 (1583) 賤ヶ岳の合戦で佐久間盛政が敗死し、前田利家が尾山城に入城し、金沢城と改めた。

前田家による築城は、尾山城の修築による堅固な城作りであった。まず、利家による天正 14 年 (1586) の天守閣と文禄元年 (1592) 本丸の高石垣の造成に始まるが、文禄 7 年 (1602) の落雷により、本丸を焼失し、寛永 8 年 (1631) の寛永の大火により城の一部を焼失したため、

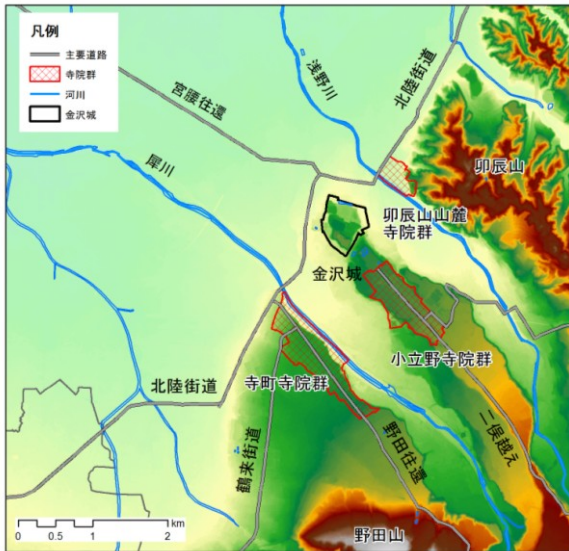


図-4 金沢城下の様子

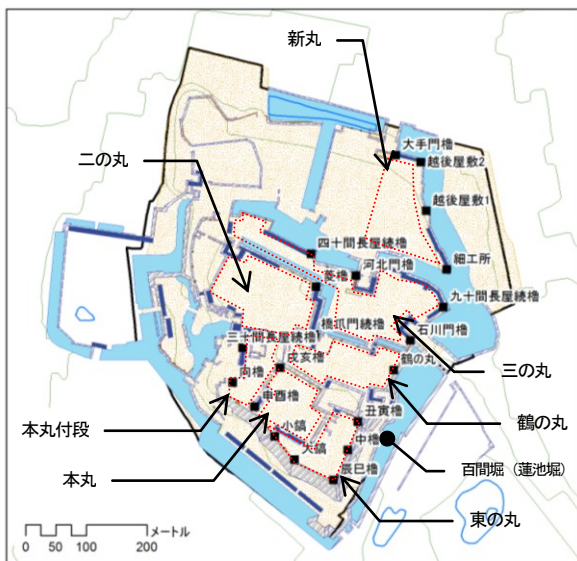


図-5 金沢城内の櫓の位置

当時の金沢城の様子を示す史料は少ない。現存する絵図のなかでは、「金沢城絵図¹¹⁾」が古く、絵図には、居城以外の建物、櫓、堀、番所などが細かく描かれている。

b) 金沢城下の歴史的背景

一方、金沢城下では、高山右近が、慶長 4 年 (1599) に城外に内総構堀、同 15 年 (1610) に外総構堀を造り、防御を固めた。元和 2 年 (1616) には、利長が宮腰往還を整備し、同 3 年 (1617) 頃から、一向宗対策として城下に、3 つの寺町を形成し一向宗の動きを監視した。卯辰山山麓寺院群は、卯辰山の麓に位置する。ここは、城下町の防衛線である浅野川と北陸街道が交差する地域である。また、応安 2 年 (1369) 桃井直和が「宇多須山」に陣取っている¹²⁾ ことなどからも、東の要衝の地であった。寺町寺院群は、犀川の左岸の寺町台地に位置し、鶴来往来、北陸街道、野田往還が合流する西の要衝である。小立野寺院群のある小立野は、佐久間盛政が攻入った地域であり、二俣本専寺や福光城に続く「二俣越え」「小又越え」と呼ばれる北陸道の間道であった。このように、金沢城下には 3 つの寺院群を交通の要衝に置き、城下の防衛を固めた (図-4)。

c) 金沢城と金沢城下の位置と性格

時代背景と絵図から分かるように、前田家は要害堅固な城作りに注力した。特に天守を持たない城には、三階櫓を始めとし、合計 21 の櫓群が配置され防御を高めた。そこで、以下では、「金沢城絵図」に記載されている 21 の櫓の位置を把握し、櫓の種類とそこから見える領域を明らかにし、曲輪ごとに金沢城からの眺望景観を把握する (図-5)。

表-1 金沢城に位置する櫓

曲輪	櫓名	階層	種類
本丸	三階櫓	三層五階	隅櫓
	申酉櫓	二層	隅櫓
	戌亥櫓	二層	隅櫓
東の丸	丑寅櫓	二層	隅櫓
	中櫓	二層	渡櫓
	辰巳櫓	二層	隅櫓
	大鎗櫓	二層	渡櫓
	小鎗櫓	二層	渡櫓
本丸付段	三十間長屋続櫓	二層	続櫓
	向櫓	二層	-
二の丸	菱櫓	三層三階	隅櫓
	橋爪門続櫓	三層三階	続/櫓門
三の丸	河北門櫓	二層	櫓門
	九十間長屋続櫓	二層	続櫓
	石川門櫓	二層	櫓門
鶴の丸	四十間長屋続櫓	二層	続櫓
	鶴の丸	二層	渡櫓
新丸	細工所	二層	続櫓
	越後屋敷 1	二層	渡櫓
	越後屋敷 2	二層	続櫓
	大手門櫓	二層	櫓門

d) 金沢城櫓群からの景観

本丸は、金沢城内で最高所（標高約 60m）にあり、ここには御三階櫓、申西櫓、戌亥櫓が建てられた。

金沢城は、文禄 7 年（1602）に落雷に合い、天守閣を焼失した。この後、幕府に対する配慮から金沢城に天守閣が再建されることはなかったが、替って天守台に御三階櫓（三重櫓）と呼ばれる三層五階の櫓が建てられた。三階櫓は現存しないが、加州金沢御城来因略記¹³⁾には、櫓の立面図が描かれており、望楼型の櫓であることが分かる（図-6）。三階櫓からは、北側の一部を除き、全方向見渡せ、城内で最も眺望性に優れていると言える（図-7 左上）。申西櫓と戌亥櫓は西の日本海に向かって並ぶ隅櫓である（図-8）。その名の通り、申西櫓からは、南西方向、戌亥櫓からは北西方向への眺望が確保されている（図-7 右上と左下）。本丸からは、これらの 3 つの櫓により全方向を見渡すことができる。

東の丸は、本丸の南東側を囲むように位置し、標高は本丸とほぼ同等である。東の丸には、5 つの櫓が建ち、

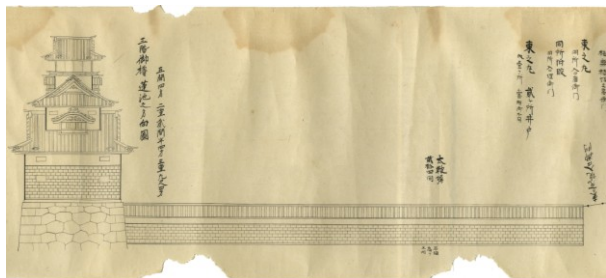


図-6 三階櫓(加州金沢御城来因略記より)

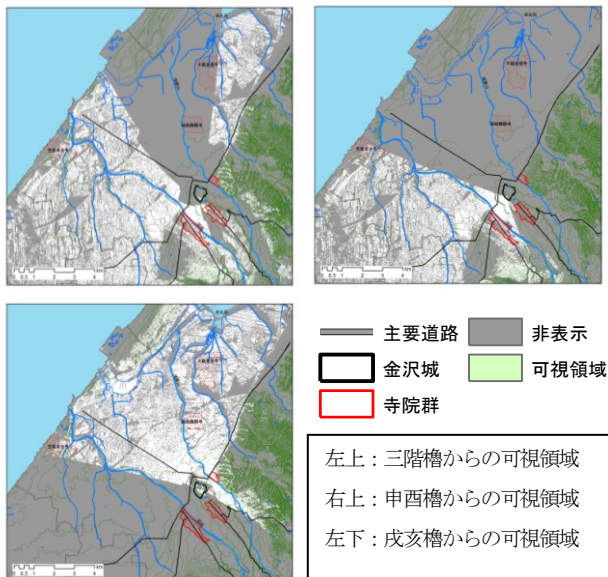


図-7 本丸からの可視領域

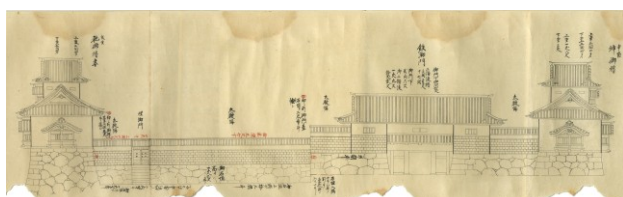


図-8 戌亥櫓(左)と申西櫓(右)(加州金沢御城来因略記より)

いずれも百間堀（蓮池堀）の高石垣上にある。この中でも中央に位置する辰巳櫓は他の隅櫓と比較して意匠が凝らしてあり、城の高石垣隅の懸崖に位置し、市内からも目立つ存在であったとされる（図-9）。辰巳櫓を中央に、南東方向には、丑寅櫓、中櫓（図-10）が建ち並び、南西方向には、大鎬櫓、小鎬櫓が連なる。丑寅櫓からは、北方の領域、辰巳櫓からは南西方の領域が眺望できる。中櫓からは南東方向への眺望が確保できる。大鎬および小鎬からは南方への視界が開けている（図-11）。東の丸からも城下全体を一望できると言える。

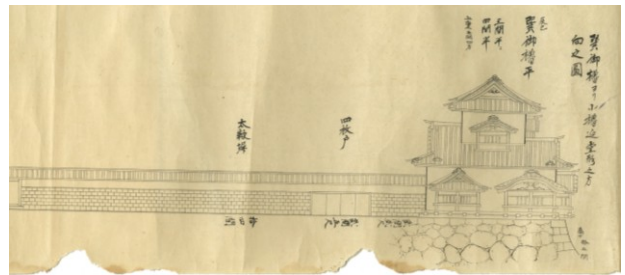


図-9 辰巳櫓(加州金沢御城来因略記より)

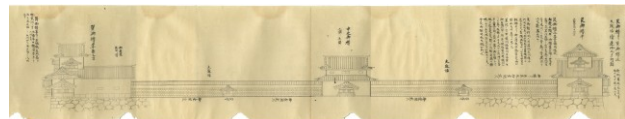


図-10 丑寅櫓(左)、中櫓(中央)、辰巳櫓(右)
(加州金沢御城来因略記より)

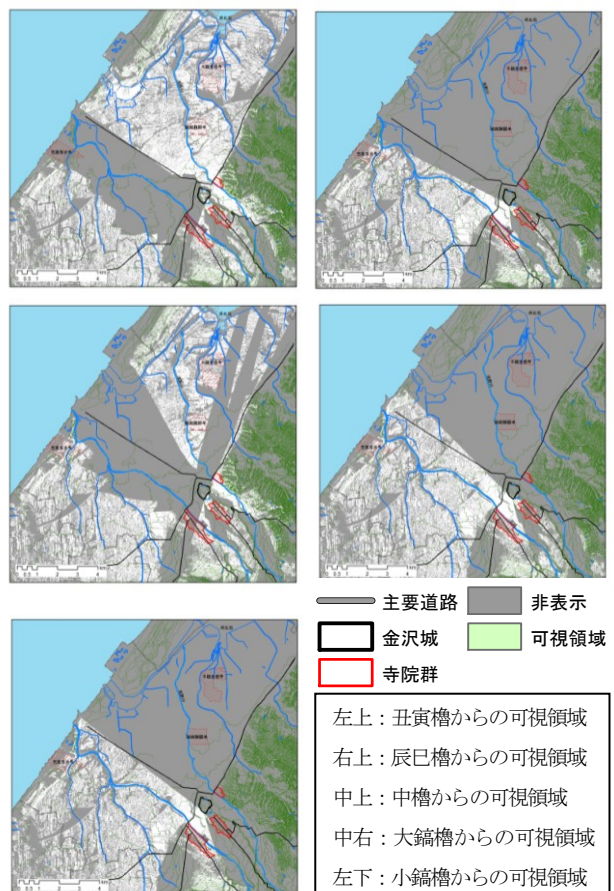


図-11 東の丸からの可視領域

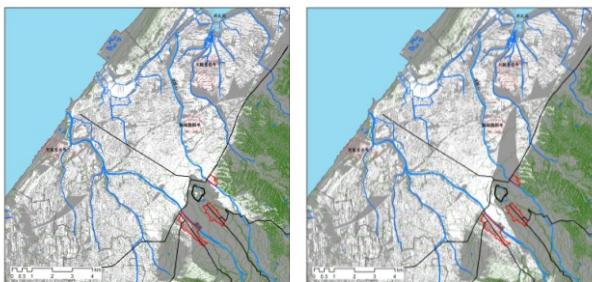
本丸付段は、本丸の西側に位置し、標高は本丸よりやや低く、55m前後である。ここには、三十間長屋続櫓と向櫓が位置する。2つの櫓からは北陸街道より西の日本海側への眺望が開け、宮腰往還が見通せる(図-12)。

二の丸は、本丸付段の北側に位置し、その標高は50m前後である。ここには、三層三階の菱櫓と橋爪門櫓が位置する。菱櫓は、その名の通り菱型をしており、隅角を100度という広角にし、物見櫓としての役割を果たすとされている。可視領域を把握すると、北方向への広い範囲が眺望できる。一方、橋爪門も三層三階であるが、可視領域は狭く、門櫓という性格から近距離景を対象とした櫓であると言える(図-13)。

三の丸は、二の丸の東に位置し、標高は45m前後である。ここには、九十間長屋続櫓、四十間長屋続櫓、河北門櫓、石川門櫓が位置する。四十間長屋続櫓と河北門櫓は、曲輪の北側に位置し、可視領域は、北方への領域に限られるが、北からの北陸街道の往来が見通せる。九十間長屋続櫓と石川門は、曲輪の東側に位置する。隅櫓である九十間続櫓からは、北から東側への見通しが良い。一方、門櫓である石川門からの可視領域は、東への狭い領域に限られるが、山間部からの街道である二俣越えが見通せると言える(図-14)。

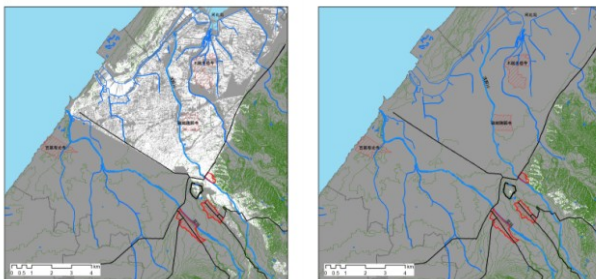
鶴の丸には、百閒堀沿いに1基の櫓が位置する。この櫓には特定の名称が確認できないため、鶴の丸櫓と称する。鶴の丸櫓は、石川門櫓の北に位置するが、石川門と同様、眺望範囲が狭いため、搦手である石川門付近を見張る目的とする櫓であることが予測される(図-15)。

新丸は、慶長4年(1599)に新築されたため、新丸と



三十間長屋続櫓からの可視領域(左) 向櫓からの可視領域(右)

図-12 本丸付段からの可視領域



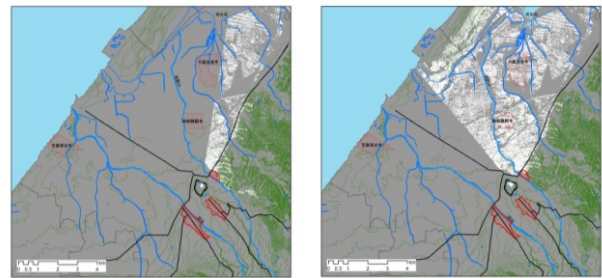
菱櫓からの可視領域(左) 橋爪門櫓からの可視領域(右)

図-13 二の丸からの可視領域

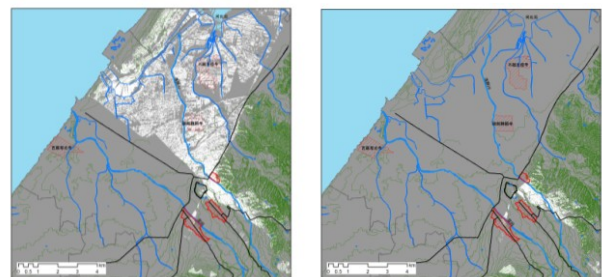
呼ばれる¹⁴⁾。城内の北側にあり、標高は、40m前後である。ここには、細工所、越後屋敷、作事所があり、白鳥堀に沿って細工所に櫓が1基(細工所櫓)、越後屋敷に櫓が2基(越後屋敷1, 2)と大手門櫓が位置する。細工所からの可視領域を把握すると、北方の領域への眺望が確保されていることがわかる。越後屋敷および大手門からは、北から東方向からの眺望が確保されている(図-16)。新丸に位置する櫓からの可視領域の共通の特性としては、浅野川より城側の近距離景が確保されているという特徴が挙げられる。

(4) 金沢城二の丸

慶長7年(1602)に金沢城は落雷に合い、この火災を契機に、城の機能の中心が本丸から二の丸へ移行する。宝暦9年(1759)の宝暦の大火により、城内の大半を焼失した後は、一部の続櫓を除き、櫓が再建されることなく、二の丸御殿の再建に留まる。「二ノ御丸御好屋口より専光寺浜眺望図¹⁵⁾」(図-17)は、安政5年(1858)絵師佐々木泉玄によって、二ノ丸御殿の庭にある御好屋(御茶室)から専光寺浜を遠望した絵図である。専光寺浜とは、金沢御堂時代に勢力のあった吉藤専光寺に由来し、専光寺町付近にあったとされる。



四十間長屋続櫓からの可視領域(左) 河北門櫓からの可視領域(右)

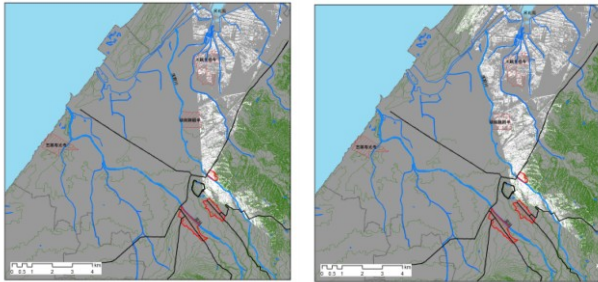


九十間長屋続櫓からの可視領域(左) 石川門からの可視領域(右)

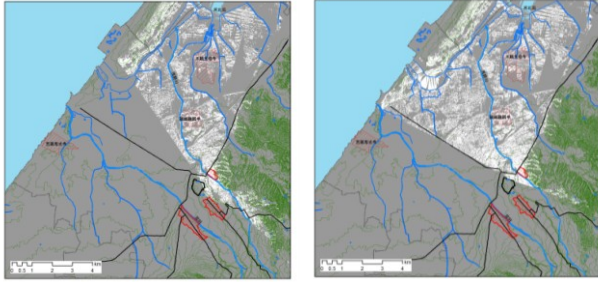
図-14 三の丸からの可視領域



図-15 鶴の丸からの可視領域



細工所櫓からの可視領域(左) 越後屋敷櫓1からの可視領域(左)



越後屋敷櫓2からの可視領域(左) 大手門櫓からの可視領域(左)

図-16 新丸からの可視領域



図-17 二ノ御丸御好屋口より専光寺浜眺望図



図-18 二ノ御丸御広式御居間遠望図

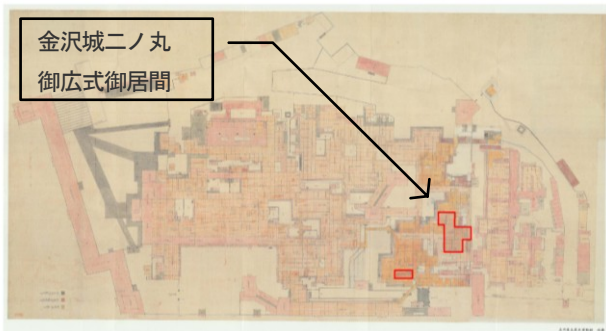


図-19 二の丸御殿平面図(赤枠：二階部)
「金沢城二の丸地図」に加筆



図-20 金沢城二ノ丸御広式御居間からの可視領域

「二ノ御丸御広式御居間遠望図¹⁶⁾」(図-18)は同じく、佐々木泉玄によって描かれた金沢城二ノ丸御広式御居間から遠望した絵図である。「金沢城二の丸地図¹⁷⁾」には、文化5年(1808)二の丸御殿全焼の後に再建された二の丸御殿の平面図が描かれ、一部二階平面図も描かれている。金沢城二ノ丸御広式御居間は、「金沢城二の丸地図」によると、二階に位置し、図-19の示す位置にある。ここからの可視領域を確認すると、専光寺のあったとされる専光寺町の一部が見える。絵図には、作庭の様子も描かれることから、防衛としての眺望と言うより、風景としての眺望が観られていたと言える。

4. まとめ

本論では、本源寺、金沢御堂、金沢城を対象に、歴史的背景から各施設ごとの視点場と視対象を明らかにした。その結果、本源寺では、日本海に沈む夕日を西方浄土に見立てる信仰の対象としての景観が明らかとなった。金沢御堂からは、信仰の対象だけでなく、天然の要害を利用し、周囲の勢力寺院を見渡せる防衛的な景観が明らかとなった。金沢城からは、天然の要害に石垣や櫓などの人工を加えた景観形成された。高所に位置する本丸や東の丸の曲輪からは、全方向へ眺望が確保されていると言える。その他の低い曲輪からは、交通の要衝など一定の方向に特化した領域または、近距離を重視した眺望を獲得していると言える。

最後に、各施設ごとに、視点場や視対象は異なるものの、日本海に沈む夕日は、時代や施設に関係なく価値観を変えながら継続して観られ、重要視された景観であると言える。

参考文献

- 1) 金沢御堂は、金沢御坊、金沢坊舎、尾山御坊とも称される。
- 2) 石若林喜三郎 他：石川県の地名，p.355，平凡社，1991.
- 3) 本願寺金沢別院，御山御坊，御山と称されることもある。
- 4) 佐藤巖英 編：本派本願寺金沢別院沿革史，p.1，本派本願寺金沢別院，1875.
- 5) 前掲書『本派本願寺金沢別院沿革史』，p.7.
- 6) 越登賀三州志：富田 景周，p.446，石川県図書館協会，1933.
- 7) 前掲書『越登賀三州志』，p.446.
- 8) 文献により聖安寺と記述される。
- 9) 石川県史 藩治時代 第二編：石川県，p.363，1928.
- 10) よみがえる金沢城 1 四五〇年の歴史を歩む：石川県教育委員会事務局文化財課金沢城研究調査室編，p.22，北國新聞社，2006
- 11) 金沢市史 資料編 18：金沢市史編さん委員会 編 ，別冊 13，金沢市，1999.
- 12) 前掲書『石川県の地名』，p.433.
- 13) 加州金沢御城来因略記：石川県書館蔵
- 14) 前掲書『越登賀三州志』，p.450
- 15) 絵図『二ノ御丸御好屋口より専光寺浜眺望』：金沢市多摩川図書館蔵
- 16) 絵図『二ノ御丸御広式御居間遠望図』：金沢市多摩川図書館蔵
- 17) 前掲書『金沢市史 資料編 18』，別冊 14.

(2015.4.24 受付)